

〔松屋筆記 五十一〕松を植る傳

松を植る時節は、寒國暖國の不同ありと雖ども、正月彼岸より二月中植れば、百に一失なし、大木の一尺より五尺に及ぶは、掘て鋸にて根を挽切り、たゞ命根タチ二三本を残して、切たる廻りによき土を入れておく、俗に是を鉢といふ、又根をまはしておくともいふ、かくして明年の二月移し植べし、梢は鋸にて切べし、梢を切らざれば活ツクことなし、松は沙地によし、又黒土眞土もよし、濕地は相應せざるよし、藤氏裕が中陵漫録四の卷に見ゆ、また橋春暉が北窓瑣談に、松の木その根さしたるやうに枝もさすもの也、枝ぶりを見てその根を知べし、外の樹木も大かた如此といへり、與清曰、松は常陸鹿島郡に生るもの奇妙也、小松を刈取し跡に、孫枝を生じて榮ゆるは、他所に未だきかず、戯に引ぬきてなげ捨置に、やがて生付オヒツクと云へり、余が見聞の松おほかる中に、坂東にて見たりしは、相模國藤澤宿と、南郷村の間には松が原あり、今も好き松四本生立り、同國會我山の六本松、早川尻の四本松、本所小名木澤の三本松、下總國印幡沼邊の大松、武藏多摩郡小山田村神明宮の大松、同郡下矢部村八幡宮の大松、鹿島大神宮の神木など、擧盡しがたし、高砂、住吉、武隈、辛崎の類の名木は、別に古書を抄出して記すべし。

〔廣益國產考入〕松山を急に仕立る心得○中略

九州或國諸侯の藩中に、山奉行を勤る正田何某といへる人あり、松苗をこしらへ、是迄松木生立あしき山、或は黒土赤土にて地味悪しき所などに植付育けるに、至つて見事なる松山となりたり、

〔杵築浦防風工事舊記〕妙見社山植留之事

一慶長三年五月、砂吹上強ク、東御田地のさわり、且は御宮山廻り砂行込甚敷ニ付、西なだ江付而は、砂除垣ヲ拵初メ、松苗壹萬五千本、南神在郷より取寄求之、宮山より見通し高見なた手迄、植